

4155

浮世からくり

視天居士著



三好

027282-000-2

特52-206

浮世からくり

視天居士/著

M20

ADJ-0010



浮世からくり序

親未居上の編する浮世機關の四街道名所々々の條目の撰し得るも神妙なり我
 輩の如き福祿道々一日も通らず金の魚彫を横目と睨て生れしより以來始終難會
 道を馳廻り銀の釣鉤を受て殆ど困迫爲たるも更ニ産業の街道又出ると能す踏張
 大も追付す王が親手ニ筆を採て著作よ似たる物を綴り書散じたる其時しも此編
 一編して曾泪眼を露せり確實の異見より遊々勝る滑稽妙案唐の聖人云るとあ
 り之を空言と載るひ之を行事と見るの深切著明なるよ如すと我の又言んとす之
 採て撫然として識す者の東京淺草の貧人或の四不出齋と號し或の烏臂と號する
 幽壁の如き人物なり



目録

福祿道

舟遊山

於止麻利の社

佐賀森

有頂貂

於ヒヤラ菓子

暴墮落

難會道

苦戰山

龍城寺

昭張太

一心腐蘭

玉雲

秩祿道

奉還山

秩祿山公債寺

ツー蘭

愚鈍氣

因循

仕方梨子

産業道

恩澤山

無能興行

移住寺

後悔

婦田

浮世からくり

東都 覗天居士著

○福祿道
 歡淫國より始め鈍澤山遊山寺等に至る道よして官門あり
 これを其乃境界となす此國富者群を爲す故よ他の貧苦を
 知らず鹿食鹿衣を識らず浮世の中の極樂世界酒色遊興衣
 服調度活計歡樂心の儘々盧生の榮花を眼前に盡くす凡
 何一として足らざるものなし常よ鈍子の濱よ舟を浮かべ
 酒の海よ碇を却ろし驪の社を順拜して夜を明石の浦より
 於止麻利の社よ通夜を爲し日曜の妓と約して戯場よあり
 び又た或時は美人草の花燈よ吟行すれば虚空よ黄金の花
 降りて音曲かまびらずしく願ぶる常盤木の樓よ綾羅錦繡を

纏ひたる天女の如きもの降下り小蝶の舞を奏して衆客の
 膝と蹴かし夜座闌中に入りての白沙の肌へ雪をまどむき
 峨山の眉は秋月の半輪よひとしく雪香韻郁として薫じ雲
 とあり雨となる巫山のたのしみ四季の詠を一時は盡くす
 菜花結構究まりなし是れ皆な銚子の濱酒の海よ遊ぶ風流
 才子の形勢あり此海水澳士よて唐茶と唱へ天竺よての盤
 若湯と云ふ佛は是を甘露と名づけ李白の滑稽て掃愁湯と
 し神國よての不老不死の神代酒と稱ふ一度此水よ浴する
 ときの忽ち大家富饒の志よ變し寶の山よ登るが如き心地
 せしむる實は神變不思議の靈水あり此海中よ一の舟遊山
 あり
 舟遊山 此山は海の酒の浮島よ在り居ながら自在の歡樂

を盡くす燈々たる陽和之を仰いで翠巖の如く更よ之を
 眺めば銀浪平らかにして數千疊よ坐するが如く遠浪岸波
 松風よ比まて美人笑ふとき春鶯囀り梅花緑の黒髪より薫
 らぬ爛熳たる花艶碧潭よ影じて梢よ漣入るれども亂落減却
 せず酷暑炎熱居ながら避け涼風肌を晒らして流汗を忘す
 れ吐胸の雲よ包めども聲散じて衆耳を喜ばしめ金風孤雁
 を送りて玉兔片雲あく月華手よとるべく猿猴是れを望み
 しも亦宜あり琪花遙かよ望めば嶺巖富峯を欺むき風の飛
 雲を吹きて夜村を埋め人の草廬よ入て深く門を閉す老樹
 濃木悉く花と疑ひ歴竹艶よして地よ垂る日は爐火能き
 程よ重柵梅臥よ世の寒を知らず凍々たる凄風扇を犯さず
 寧ろ醉眠の醒むるを是とす勝景心意を悦ばしめ榮花志を

轉ず鳥中自ら美味珍膳酒色及び山海の佳品を生じ夜に燭
を点じて白晝も異ならず實よ一種の仙境にして今前よあ
るかと思へば忽然として後よ浮かぶ心の欲する所ろよ隨
て絶景佳境も八臂の如くまた山中よ佐保姫お等しきうた
姫と云ふ仙女ありて能く陰陽の術よ長け藤八及び諸
の拳術を行ふこれよ心を奪ひるもの多しとなん
於止麻利の社ほのくとも明石の浦の人麿の社なりあれ
のほのくとも夜を明石の浦なじと山鳥の尾かながくと
幾く夜も二人かもねんと誓ひあふ俗歌よ
ほのくとも夜をや明石の浦なじみ
今日かへりゆくかげおしと思ふ
扱又本母の新造二十五歳夜晝太夫部屋持卿の寄附よより

てアリンヌ國の嘲諷禪師自作の像を建立す
佐賀森 此森の銚子乃濱邊よ澤山あり此森よ一種特別の
草あり其の形ち盆の如く花金銀の樣よて實はクアンボ
よ似てたわひ梨子よも似て甚だたわひあし
有項貂 此れも佐賀森よ住む獸よして音曲を好み興よ乘
じ頻てよかけ廻り立頓ぶこと自由自在あり其形誠よしだ
らけなく手を打鳴らし報間をたき頼べたをなめまた口
をすひなとし變痴奇あ聲あして君よーくと呼べばチャソ
ウテンスカおと鳴くこと妙なり
於ヒヤラ菓子此國の商人達の能く製造するものよして至
つて賣れ口よろし然れども能く喰み入るれば其味知れて
人々再び食はずとあん

暴墮落 此魚酒の海よて産すグニヤくとして何の用も
も立たず又た何の害もならず此魚一たび寝むるときは
食物も忘れて起きず

○ 難 會 道

忠誠國より苦戦山龍城寺に至る道なり入口より一心貫と云
ふ關門あり此關門錢壁の如くよして容易よ入ること能
ず又た此國の難場多く特よ虫魚の類夥多しく人をして驚
怖せしめざるのあし忠憤義膽忠節あんと稱ふる武士國中
よ義士くんと充ちて殆んど立錐の間なし皆亦剛原なる竹
敷よ住む此心し性強情よしして勢ひあざりがたし人若し
銳鋒利刃を以て之れを驅逐せんとすれば忽ち北敵中よか
くる加ふるよ脱草あたりよはびこりて大よ驅除の効げを

あす此草金鐵の如く閃々として肉眼などの中及ぶべ
らざる一種の變的なる草あり全軀此心しよも又大忠小忠
の別ありて各々其黨中を總理するものありと云ふ故よ一
國の情勢よ能くも似たる所ありとかや此心し常よ君臣一
致上下合体して一体分身の如く清白潔明よして天下晴れ
て少しも曇らず正義堂々として刀折れ玉盡きいさぎよく
商しがたきを知ると雖も他の抜兵を頼まず獨り孤城を守
りて自若たり昔日後醍醐天皇と守護して雲中の櫻樹へ天
勿空勾賤一時非無范蠡と記したる備後の三郎兒島高德よも
あさく恥ぢざるべく吳子胥楠公よも比敵すべし是れ將
さよ大丈夫の心胸を寫出するよ足るべき乎彼れ既よ國家
の法度典刑を紊亂するの兇徒なり然れども其心情を察す

るときは固と是れ慈善義侠の爲めのみ何すれり一身の私
利も汲々たるものと日を同ふして語るべけんや實は士道
の龜鑑どころ賞歎すべけれ嗚呼時ある哉然れども寡の衆
よ敵しがたかく弱の強を凌ぐ能はざるの物の數おして又た
人事の奈何とすも能のざる所なりとは云へ終は刀折れ
丸盡き勢ひ充まりて一身容るゝよ地あく苦戦山籠城寺よ
沈落せし抑も又憐むべく歎ずべきの至りならずや
苦戦山籠城寺 降人天王の説得年中の開基として本尊の
義者門天並に存在天の天下泰平報國祈誓の爲め俠義菩薩
の憤作なり刑法年中に至て本堂の内安置す次でなみだ
如來立たせ賜ふ扱又本尊の苦戦山中よあるを以て種々奇
異のものあり固と此山の四境の皆な名だゝる山脈を以て

園こみ接戦山奇兵峙伏兵嶽加勢峯等あり皆か峻峻なり人
若し此山よ登るときに艱難辛苦進退維れ谷むると云ふ
踏張太 此虫バつたよ似て物身よ兜の損壞あり手足の劔
の如く敵よ對して一寸も跡へ引かず終よいさぎよく身命
を抛つ古人之れを稱して殺虫と云ふ
一 心腐 此らん敵國へ向つて生育し少しも臆身をふら
ず 千辛万苦してたとへ根を絶ち葉を枯らすと雖も是を厭
みず 其花至つて芳しき匂ひあり普く國中よ薫ず
玉 此あられ晝夜絶間なく降りて止まず若し夫れこれ
よ 觸るゝとき忽ち絶倒する事甚だあやうし其猛烈なる
よ 至りては鉄壁も砕き堅城も破ぶるの勢あり此もの防さぐ
事かたし地を穿つ程頭を下ければたましく通るゝなり嗚

呼危ひ哉

○ 秩 祿 道

飛鳥川昨日の淵の今日の瀬と變はる榮枯盛衰の定めなき
實は浮世の習として是非もなきことぞかし技は如何あると
ころぞや其名も知れし秩祿道東西南北縦横十文字至ると
ころ行く所右も左も飛鳥川是ぞ徳の川の支流なり川中淵
岸頗ぶる多く五人ふち十人ふち等の稱あり水勢激湍宛あ
がら閃々たる白刃の如く平人などの中々仰ぎ見るをも得
る能はざる所なり一滿つれば缺くる世の習ひと云ふも
の、茲は減祿年間も當て一天俄か暴風波激して益々
止まず震動猛よして愈々制すべからず遂は地割れ水溢れ
淵岸没落して忽ち大瀬と變せしとぞ次で人民の狀態如何

を視へば此の震動のためは歴倒せられし家屋其幾百万戸
なるを知るべからず長幼相救ひ老壯相助け手取り杖どり
奉還山へ遁がるゝあり金祿山と逃くるあり其他歸商歸農
の諸嶺は走避せし者其數又知るべからずとなん家財の更
あり着替の一つも餘さばこり昨日まで高麗錦の其上は榮
耀榮華の生活を爲して花晨の嵐月夕の雲より外は世の中
も憂きこと知らで居たる身の今日の襤褸の衣一重影も形
もなき瘦世帯炊ぐ烟の絶へくなる昨日の家老も今日の
學校教師と變し朝の輿様も夕よの三を氣ぬる世の中と
なりしに借てもあわれなることならずや
奉還山 此れは其先き金祿山と云ひし山として減祿年
間も變事ありし其時よ當り人々急を逃れんとして登りし

所なり此山は登らんとするは印形菩薩の守札を携へて行く然らずに頂きと達すること能はず此山の他山どちがひ氣候温和として凌ぎ易しと雖も長く住する時の必ず究迫病に罹りて苦しむ又歸商山に登る者は多く流行の奸商疫に觸れて苦しめらるる兩疫とも中々油断の出来ぬ疫疫ありこれがため二つとあき命をも奪はるゝもの少からず國人此病にかゝる時の直ち安位受庵を頼みて其病を療治すると云安位受庵直ち其病狀に從て其藥劑を與ふ奇藥あり曰く

半人膏 警仕水 棒丹 學校丸 商社圓

右病狀の輕重に從つて服用せしむ然るときは能く治すと云ふ

秩祿山公債寺 滅祿年間維新法師の建立よして本尊は素と御藏波大明神を祭りし跡なり今時再建してより財政困難大師利子菩薩を安座し奉つる此國人多く其證書を持つ毎年二度御開帳あり人々其日を俟つや殆んど一日千秋の思を爲す故に其期日よ至れば我れ先きくくと競ふて参詣す御利益至つて多しと云ふ

たい屈 此寺の後ろよりあり胡座をかき或は寝たる姿あくびを爲したる風の岩穴よして食大師喰大師の二師安坐し玉ふ

ツマ蘭 ひよろくとして懐手したる体よして其花のうつ心き鬱々として日をくらす

愚鈍氣 此草薬くすも似て只ほんやりとして何の役も

立たず忙しき時あどよは却て邪広よなるものなり
 因循 よんぢんよ似て少しも味なし兎角よ延びか、つて
 の止み花を持たんとして其ま、よふり何の効能もあく些
 とよ役よ立たぬものなり
 仕方梨子 たましく花をさかせ實なりても振向もせず其
 ま、よしなひて仕まふ甚だ不便無用の菓物なり

○ 産 業 道

此道の我慢國より移住國恩澤山等よ至る道なり此國人聊
 我忠義らしき處あれども其實のまけおしみと我つ張あり
 至つて強國なりしが今時勢ひ少しもなし常よ迷ひの雲一
 面よ充ちて思ひ露ふん霧を拂ふこと能はず手先きくが
 真闇らやみよして更よ目的あし應は死しても穂は啄まず

武士の喰いざれども高揚子など、左も高慢らしく將來よ
 望を抱くもの我れ獨りナポレオン尿喰らへ加藤清正素
 足て逃げだす彼れ樊籠の勇ありとも我れ安んぞ項王の威
 なからんやなど自分免許の大博士千や萬の金ならば座し
 ても得れる事なりと仕濟し切つても何よもならず免や角す
 る其中よはや光陰の廻り來て高慢どころか今日のくらし
 も何したものでや明日の炊米の工夫よ困まる有様とあり
 ぬるこり氣の毒なれ思按投首如何のせんど家内評議の其
 上思ひくよ夫れく知己の許よ馳け廻わり何なり蚊なり
 一の産業を營まんど頼みすれど案より手馴れぬ事ゆゑ
 何分糊口法よ苦しみしが漸くふでと云ふ田へ迷ひの種と
 頻りよ時くと雖とも少しも實あらず退々疲弊して二進も三

進もあらずこれよりろく家具調度を賣代あし後悔よ
 り渡りよ舟を求めて福祿道金満山へ漕附けしも格別の事
 もあらず浮かしく心ならずも光陰を過せしとなり勿論此
 國の人固より悪心邪念の所爲も無之ゆゑ天光深く憐み玉
 ひつらん移住國內も恩澤寺となん稱へつる寺堂を借り受
 けこれよ其人々を住せしめ専ら回復の事を施行せしむ爰
 よ於てか各々鰻魚の良水を得たる如く我さきよ此布施よ
 積らんと蟻の甘きよ属く如く骸兒の乳房を慕ふ如く活路
 を得て始めて愁眉を開きしなり嗚呼迷へる哉此國人初手
 よ一心決定せば奈何ぞ修羅の街よ苦しむべき一心の外味
 方なしどの世人の知る所兵書よも百戦百勝の一忍よ不如
 とあて一以て之を貫くとい古人の金言なり

恩澤山 此山の樹林の皆を移住の木一面よ繁茂し其下の
 常よ冷からず暖からずよと温風薫く人々好んで此
 山よ登ぼる其昔し人々多く登しよりお救ひ神社と云ふを
 設け仁恵朝臣を祭つる期日よの無能興行を催す番附左の
 如し

無能興行番附

一 難場走
 一 陰辨慶
 一 困迫太夫
 一 お祝也
 一 厭照傳
 一 當世太夫
 移住寺 改革天王の御宇施徳年中奇特朝臣の開基よして
 本尊の借錢大師因縁禪師の貧像よ名刻して安置す近時此
 寺よ五百蛇灌と座置す人々お開帳を俟ちて参詣すると云
 ふ

- 一 ちんたらこんじや
- 一 利屈のむかん
- 一 貸したらうんじや
- 一 呑だら大酒じや
- 一 グテン法師
- 一 評議菩薩

此外尙ほ四百九十四の蛇窟あり然れども悉く記すべから

す
後悔 此海思慮淺く一定せず時々種々の風吹く又た此の
海邊常々寒からず暖からずグーく寐たる音アワ、いと欠
神の聲して常々吹く風あり土人之を稱して時を待つ風
婦田 此田至つて實入ありし幾俵迷ひの種を蒔き附けて
も嘗て秋に至りても冬ななりても春が來ても夏へいりて
も一粒も實りしことなし蓋謠よ曰く
拾つるかゝの中より拾ふ紙くづり

すき返しても愛はあさくさ

浮世からくり終

明治二十年九月廿四日御届
全 年十一月 刻成

定價金廿五錢

日本橋區龜井町六番地

翻刻人 中島儀市

賣 捌 各書林繪艸紙店

2A-9

至誠堂發行書目

●前九年日本外史衍義 全壹冊

定價金四十錢

該書ハ頼義義家兩將軍ノ征討ニ係ル前九年後三年ノ役即チ責任宗任家衡武衛等ノ戰亂ヲ婦女子ニモ解シ易ク傍訓ヲ以詳記シ加フルニ密書數葉ヲ挿入セシ良戰記ナリ乞フ江湖ノ諸君比愛讀アラソクヲ冀上候

●繪本和田軍記 定價金一圓八十錢

●繪本菅原實記 定價金一圓

●佐野義勇傳 全金八十錢

●古端唄大全 全金三十錢

●繪本前太平記 全金一圓

●新編明治毒婦傳 全金一圓

●大岡政談きられ與三郎實記全 全金六十錢

●大岡政談花咲屋藤作實記全 全金一圓

●高橋阿傳夜叉譚 全金一圓

●田宮孝勇傳 全金五十錢

●忍業出世之鏡 全金廿錢

●廿三年未來記 全金三十五錢

●瀧岡繁昌記 全金六錢

●時事新話明治乗合船全 全金三十錢

●浮世からくり 全金廿五錢

●考物道化發句 全金三十錢

●書生きもつぶ誌 全金三十錢